

法仏式と月影式

田嶋 明人

1 はじめに

本稿の当初の目的は、月影式の上限を確定し、月影式の様式的特徴を整理することにあった。それは、筆者にとっては、漆町編年で月影Ⅱ式を白江式（田嶋1986、2006）としたことにより、月影式の「型式」内容の再整理が必要となっていたことにもよる。しかし、検討を進める内に、法仏式新段階（表1での2群）の全てを月影式と同一の様式としてとらえざるを得ないと考えるに至り、法仏式の上限と法仏式の様式内容の検討も必要となった。

具体的検討では、月影式の特徴とされる「強固な地域性」を象徴する北陸固有型式の中から、供膳、墳墓への供献、祭祀等に用いられた形式（以下祭式土器と呼ぶ）を対象とし（注1）、その成立、展開、変質・衰退の推移を跡づけることとした。北陸固有型式にこだわったのは、法仏式と月影式が、いわゆる外来系土器を主要な組成とする猫橋式（注2）と白江式に挟まれてある土器群であることにによる。

結果として、法仏式新段階と月影式とを同一様式として理解することを提案し、法仏式新段階と月影式は大別様式の中での小様式ととらえた。そして、法仏式古段階（表1でのV-3群）を法仏式から除外した。また、法仏式と月影式の境に関する作業仮説と、從来から議論のあった塚崎21号竪穴の帰属についての試案を提示した。

このことにより、月影式が顕著な個性をもった個別の様式であるとの自らの呪縛（註3）から一応の解放を得たとも思っているが、新たな課題も生まれた。そして、祭式土器という一部形式での検討に終止し、さらには、現物にほとんどあたらないまま、報告書により検討を進めたため、重大な誤りや、誤解が多くあるのではないかと思われる。ご寛容頂き、ご叱正、ご教示の程お願いしたい。

2 研究状況

1) 編年案について

表1は、今回提示する編年案である。漆町編年との関連では、法仏式にあたる2群を2分割。（+）群を3-1群、3群を3-2群とし、月影式にあてた。4群から白江式としたことの根拠等は、別に報告（田嶋2006）している。

本稿では、2群（法仏式）と3群（月影式）を主たる検討の対象とするが、後続する4群以降の理解は漆町編年によるとして、先行するV様式併行期の様相については、以下のような理解の元、検討を進めている。V-2群とV-3群は一つの様式に包括できるとの予測である。

V-1群 IV様式からの様式的特徴を踏襲する段階

V-2群 その様相を払拭し北陸型様式の直接的端緒となる段階

V-3群 北陸型様式の素地が作られる段階

2群 北陸型様式（地域）が成立・開花する段階

表1 加賀でのV様式併行期から白江式にかけての編年

編年案			標式資料			現状での型式名	谷内尾 1983 (1996)	楠 1996 (1995)	柘木 1995 (1995)	高橋 2000 (1995)	
群	型式名	漆町 編年 (1986)	加 (北加賀)	賀 (南加賀)	越前・能登・越中 (比較資料)						
1群	V(仮称) 1	1群			(南新保J区1号溝) (猫橋9号溝)	猫橋式	2期			後期Ⅲ期	
	V(仮称) 2				八田小駄Ⅱ区3号住居6号溝等 旭SI64						
	V(仮称) 3				二口町豊穴 桜田・示野中SB10 平面梯川106号溝 平面梯川105号溝						
2群	2 1	法仮式	2群		中奥・長竹4次2区SI01 八幡SH-22 北安田南出3区SI01 竹松3号住	江上A SD1、SD2他 (越中) 谷内ブンガヤチ30号土坑 (能登)	3期	法仮式	7期	後期Ⅳ期	
	2 2				倉部SI02 中奥・長竹3次3区SK02 中村ゴウデン8号住						
3群	3 1	月影式	3群		高橋セボネSK54 八里向山A SI101A 一塚SX22 戸水大西SE18	吉崎次場 S-3b土坑 (能登)	4期	月影式	8期	庄内併行 I期	
	3 2				御経塚シンデンSK50 御経塚タチナカ7号住 御経塚タチナカ14号住						
4群		白江式	4群		月影土坑 御経塚シンデンSI07 御経塚ツカダ82-3住	谷内ブンガヤチ2号豊穴 (能登) 東古市綱手1号住 (越前)		月影Ⅱ式	5期	庄内併行 II期	
5群					御経塚ツカダ82-2住 (松寺A-1号溝) (漆町33号溝)						
6群			5群	白江式	南新保D、BG-20 松寺SK56 額新町ST01	今浜A4号豊穴 (能登) 漆町298号土坑 漆町7号溝下層		白江式	9期	庄内併行 III期	
			6群		滝谷八幡社SB10 (能登)						

() 参考資料

2) 研究状況と課題

<法仏式と月影式の現況>

月影式は、浜岡賢太郎、吉岡康暢が設定（浜岡・吉岡1962）、谷内尾晋司がⅠ式とⅡ式に細分した（谷内尾1983）。しかしその後、先にも触れたが、筆者が漆町編年で月影Ⅱ式を白江式（田嶋1986、2006）としたことにより、「型式」内容の再整理が必要となっていた。漆町編年では、この課題に答えるものとして（+）群を設けたが、詳細は未検討のままとなっていた。

法仏式は、谷内尾が上記論考で猫橋式と月影式をつなぐ「型式」として設定した。法仏式に関しても、その後、栃木英道、楠正勝が詳細な編年を提示（栃木1995、楠1996）したが、時間幅で谷内尾が設定した法仏式と整合しているとはいえない、栃木と楠の編年の間にも根幹部分で不一致が見られる。

この状況は、法仏式、月影式が、資料が少ない中、点的資料で設定された「型式」であったことにもよるが、その後、資料が増加したにもかかわらず、「型式」的、様式的特徴を何に求めるかの検討が必ずしも十分でなかったことに原因があると考えている。このことは、塙崎21号竪穴資料を、時間軸では概ね共通理解に達しているにもかかわらず、法仏式とするか、月影式とするかで確定をみていないことにも、象徴的に現れている。

<研究事例>

該期での様式理解に関しては、吉岡が、塙崎Ⅱ式（21号竪穴段階）を塙崎Ⅲ式（月影式）に包括するか、塙崎Ⅰ式（月影式以前）に包括するかの検討にあたって、結論は保留しているが、塙崎Ⅰ式との比較で祭式土器の形式・組成の違いを指摘している（吉岡 1976）。該期の様式理解にあたって祭式土器を検討対象とした最初の事例であろうか。

その後、谷内尾により法仏式が設定されるが、それを受け栃木は、月影式前段階の土器様相の理解として、猫橋式からの系譜をもつ土器、新たに出現する形式、猫橋式からの系譜をもつものから派生し別個の形式として展開するもの、からなり、は月影式に継承され主体的形式となるとし、様式を構成する形式・組成に言及。さらに、の動きを、V様式を二分する画期と評価する。そして、を法仏式の組成として理解し、谷内尾編年の法仏式の概念を修正・再構築した上で、月影式の前段階の全て（V - 3群、2群 = 筆者追記）を再度、法仏式と呼称したい、とする。栃木の指摘は、該期の組成に詳細な検討を加えたものとして大いに評価できるが、を月影式に継承され主体的形式となるとする一方で、月影式の独創性とは何かが問題になる（新出形式は、月影甕と結合器台のみ）とする。潜在的にせよ法仏式と月影式を独立した様式であるとして検討を進めたためか、とも理解している。

対して木田 清は、月影式に見られる形式の出現をもって月影式とするとした（木田1998）。丹後系の北陸型鉢形高杯（注4）の出現をもって月影式とするのである。木田の理解では、法仏式新段階のかなりの部分が月影式となる。「月影式とされた版型」の再検討を迫るものとして、同時に栃木の課題を解決するための切り口の一つとして評価したい。

一方、吉岡は、弥生期の土器の編年と画期を検討するなかで、弥生VI期を設定し、法仏式をVI - 1期、月影式をVI - 2期とし、両型式をVI様式の大別様式の中に含めた（吉岡1991）。さらに、先行するV期の土器様式の特徴を（多地域の形式を = 筆者追記）合成した北陸型土器組成の成立、VI期を定型化された北陸型祭式の成立、と論じている（吉岡1991）。ただ、吉岡の論考発表時には、加賀・能登ではV - 3群の良好な資料がみられなかったこともあるが、V - 3群と法仏式との関連は判然としない。

その後、柾木、楠により詳細な編年が提示されることになる（柾木1995、楠1996）。

<楠編年、柾木編年にみる法仏式>

加賀、能登を対象とした、該期の編年的研究は多い。主要なものをあげれば橋本（1975）、吉岡（1976・1991）、谷内尾（1983）、柾木（1995）、楠（1996）、堀 大介（2002）がある。もっとも詳細な編年が示されている楠編年、柾木編年から、法仏式の理解について具体的に検討する。

楠編年は北加賀地域の土器群を対象とし、3期を法仏式とし、4小期に細分する（楠1996）。次項で検討するが、筆者が該期の指標と考えている北陸型形式（図1・2）の出現時期（ないしは存在するとする時期、以下同じ）を編年表からみると、北陸型の鉢形高杯は、初現形式A類および定型化形式II類が3-2期、器台は初現形式B類が3-3期、定型化形式は3-4期、有段小型壺は初現形式A・B類が3-（2）・3期、定型化形式II-Ba類が3-3期と4期の交、有段鉢は初現形式が一部3-2期で主体は3-3期、定型化形式II類は3-3期には確実に出現するとする。

このように、楠編年では3-2期に、北陸型の鉢形高杯、有段鉢の初現形式と鉢形高杯の定型化形式II類を置くが、器台、有段小型壺、有段鉢の主体は初現形式も含め3-3期以降、3期の後半段階とする。そして3-2期とする鉢形高杯は溝等資料であることから帰属を保留するとすれば、検討の対象とした形式の出現時期は3期でも新しい段階となる。楠編年と私案との対比は表1に示したが、楠編年3期が私案のV-3群から2群にまたがっているとの理解で良ければ、ここでみた形式の出現時期は、楠編年の後半段階で、2群に相当するとできる。時間軸は概ね一致することになる。

柾木編年は能登地域の土器群を対象に、法仏式併行期を7期とし4小期に細分する。そして7期は楠編年3期に対応するとする（柾木1995）。楠編年同様、該当形式の出現時期をみると、鉢形高杯ではB類の初現形式が7-1期と2期の交、器台は初現形式D類が7-1期、定型化形式II類は7-3期、有段小型壺は定型化形式II-Bb類が8-1期、有段鉢は初現形式E類が7-1期、定型化形式II類が7-2期とする。柾木編年は、楠編年と異なって、北陸型の鉢形高杯、器台、有段鉢等の初現形式の出現を7-1期におき、器台、有段鉢の定型化形式II類も7-2・3期と古く置く。

楠編年3期は、私案でのV-3期を含めているのは前記の通りで、私案の様式区分と異なる。従つて、北陸型の形式に関しては、楠編年の3期を区分する指標としては重視されるはずもない。対して、柾木編年では、柾木自ら指摘した前記 の動きとして、くだんの形式の出現を7期成立の指標としているようにとれる。が、7期と楠編年3期とは併行関係にあるとする。両者の編年は、時間軸と法仏式とする様式内容の理解で大いに異なっているとしかできない。柾木編年7期に関しては、私案での2群に相当すると理解し、該期の有効な編年とみたい。

3 北陸型形式の成立と推移

1) 北陸型形式について

2群には、組成をなす各器種に北陸型の形式が成立すると整理している。2群の祭式土器の中から鉢形高杯、器台、有段鉢、有段小型壺、有段細頸壺を対象に、北陸型とできる形式を抽出し、その形式分類を試みる。さらに型式的特徴により初現形式、定型化形式とに分ける。初現形式は北陸型の祖形となる形式。定型化形式とは北陸型形式としての完成型式を指す。また、定型化形式に関しては、初現形式の型式的特徴を踏襲するものをI類。型式を大きく変化し明瞭な北陸固有型式とできるものをII類とする（註5）。II類の要件をさらに示せば、便宜的ではあるが、型式変化を踏まえプロポーションでの完成型式であること、全体の器肉が一定し薄く仕上げて（仮器化）いること、類例が

定量的にみられること、等である。

北陸型形式を以上により整理してみたが、初現形式と定型化形式については典型的なものは容易に区別できるが、中間的形態の型式もみられ、初現形式と定型化形式の系列に関しても、その間の推移が必ずしも連続的でなく、別要素が付加されることもままみられた。ここでの分類、系列の整理については、北陸型形式の多様性と推移の大枠を理解頂くための暫定的なものとして了解頂きたい。

＜鉢形高杯 図1＞ 2群にはⅤ群以来の有稜高杯もみられるが、該期に出現する鉢形の杯部をもつ高杯を対象とする。A類からD類の4類を抽出した。鉢形高杯は、北近畿地域の高杯の系譜で理解している。

1・4は、A類、B類の初現形式で多分に山陰の影響もみられる。型式特徴から初現形式であるが北陸固有の形式としたい。1は該期の甕口縁に近い形態をもつ。擬凹線をもたない型式は確認していない。2は、初現形式の形態的特徴を備えており定型化形式Ⅰ類とする。定量みられる。3は本類の定型化形式Ⅱ類とできようか。4はB類の初現形式で口縁部下端も薄く作り鋭く屈曲する。擬凹線をもたない型式もみられる。5は、A類ないしB類の系列にある定型化形式Ⅰ類としたいが、有段鉢F類との関連も残したい。6は希な事例であるが、A類ないしB類の系列にある定型化形式Ⅰ類としたい。7はB類系列の定型化形式Ⅱ類とできようか。

C類とした8は、緩く屈曲した頸部から口縁部を伸張する形態の初現形式で、北陸固有の形式としたいが、特徴が少なく保留する。9は定型化形式Ⅰ類とできようか。Ⅱ類とできる事例は例示しなかったが少なくない。

D類とした10、11は初現形式。北近畿に先行形式が見られ、その系譜の形式であることは確実であるが、口縁部を伸張している点で、北陸型としての型式変化をはじめた変容形式ととらえたい。12は定型化形式Ⅰ類とできよう。Ⅱ類は確認できていない。

他にも北陸型とできる鉢形高杯の系列が存在するとみているが、確定に至っていない。

＜器台 図2＞ 山陰系譜の器台を対象とする。A類からD類の4分類6細分した。対象とする初現形式はすべて北陸型の固有型式と考えている。

A類(1~5)は、口縁部と筒部との間に明瞭な境をもたない形式、口縁部がさほど伸長しないものをA-1類とし、1~3を初現形式。伸長するものをA-2類とし、4を初現形式とした。筒部は3のような柱状のタイプと、4・5にみるラッパ状に湾曲するタイプがみられる。ここでは、全形の分かる資料が少なく、筒部での分類はとらなかった。14はA-2類の系列での定型化形式Ⅱ類とできようか。そして筒部柱状のタイプに属する。器台での定型化形式Ⅱ類は本例を挙げることで省略する。なお、5は、口縁部を伸張を完了しており全体の形状では定型化した型式と同一の形態を備えるが、器肉がやや肉厚で均一でなく、擬凹線文やスタンプ文で加飾しており、定型化形式Ⅰ類とする。スタンプ文等での加飾の有無は、その器種や使用の場との関連での検討を要するが、一般論として古い様相とできよう。B類(6~10)は、口縁部と筒部との間に明瞭な境をもつもので、A類同様口縁部伸張の程度によりB-1類とB-2類に細分した。8は越前の事例で、B-1類と判断しているが、本類のすべてがこの形式で占められるとはできない。なお、B-1類あるいはA-1類では、Ⅴ期での山陰系器台と区別の難しいものを含む。

C類は、小型で、定型化形式となっても口縁部がさほど伸張しない形式として分類した。11は初現形式としておく。

D類とした12・13は、脚部が受け部に匹敵するまで大きな脚部をもつ。本類も口縁部、脚部が伸長するタイプと相対的に伸長しないタイプがみられるようである。12・13は定型化形式Ⅰ類、Ⅱ類は

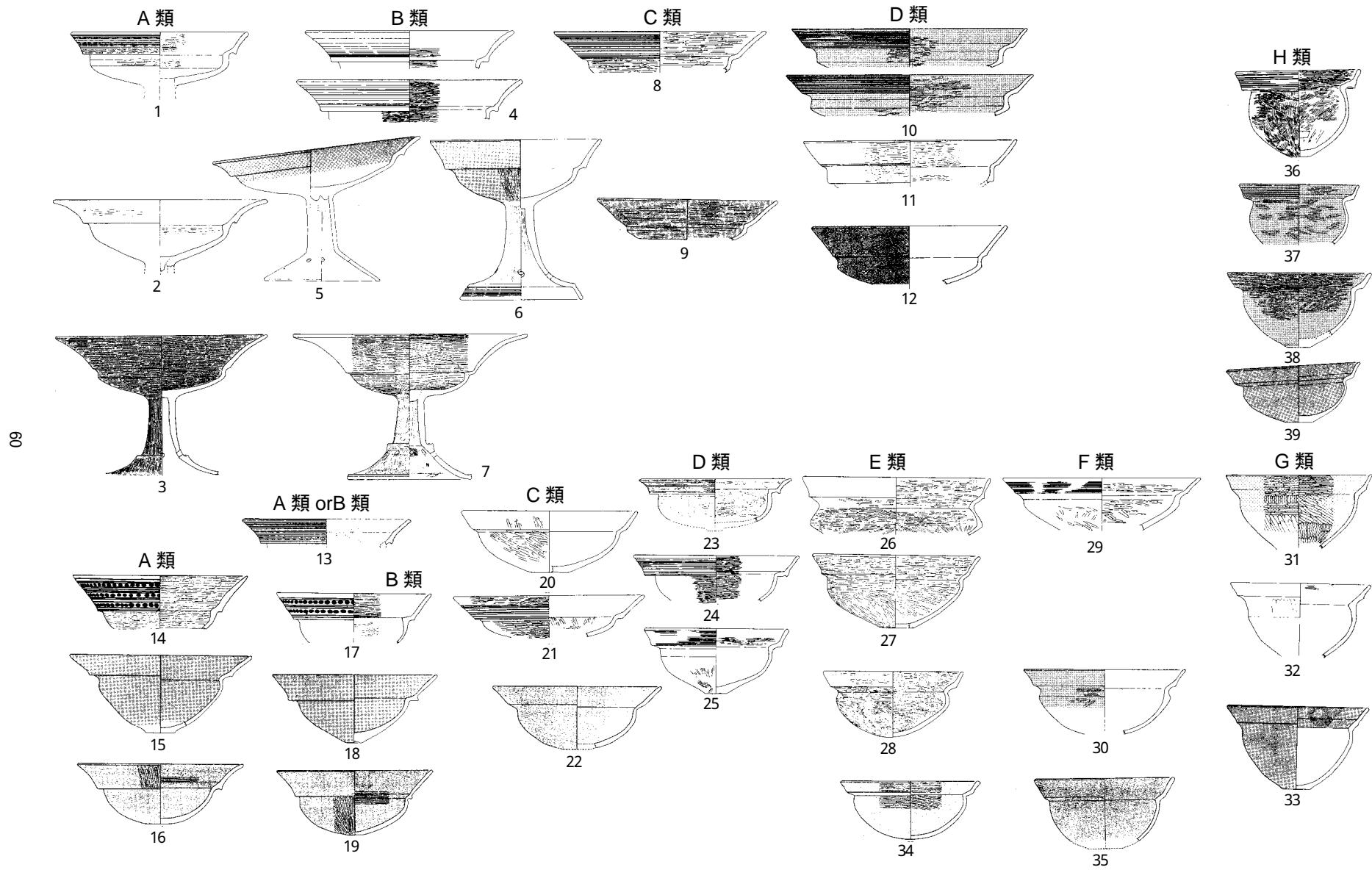


図1 鉢型高杯・有段鉢の分類 (S = 1 / 8)

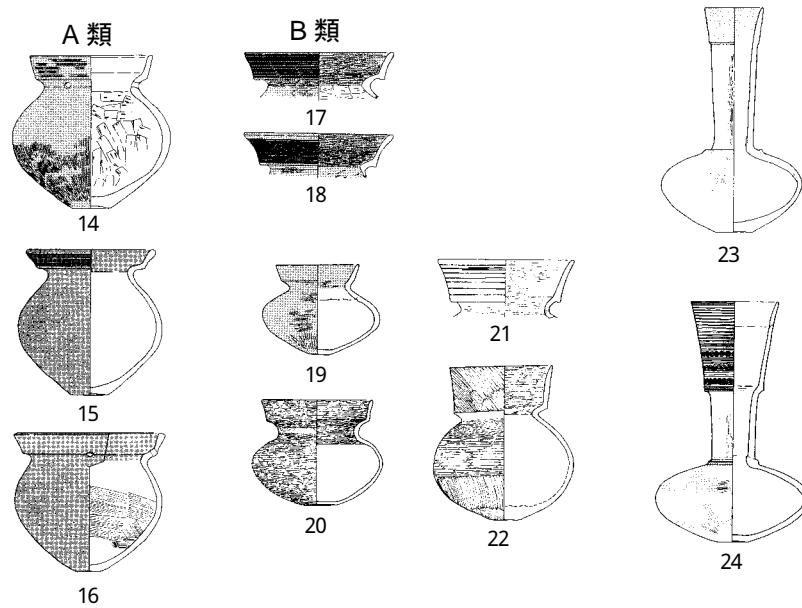
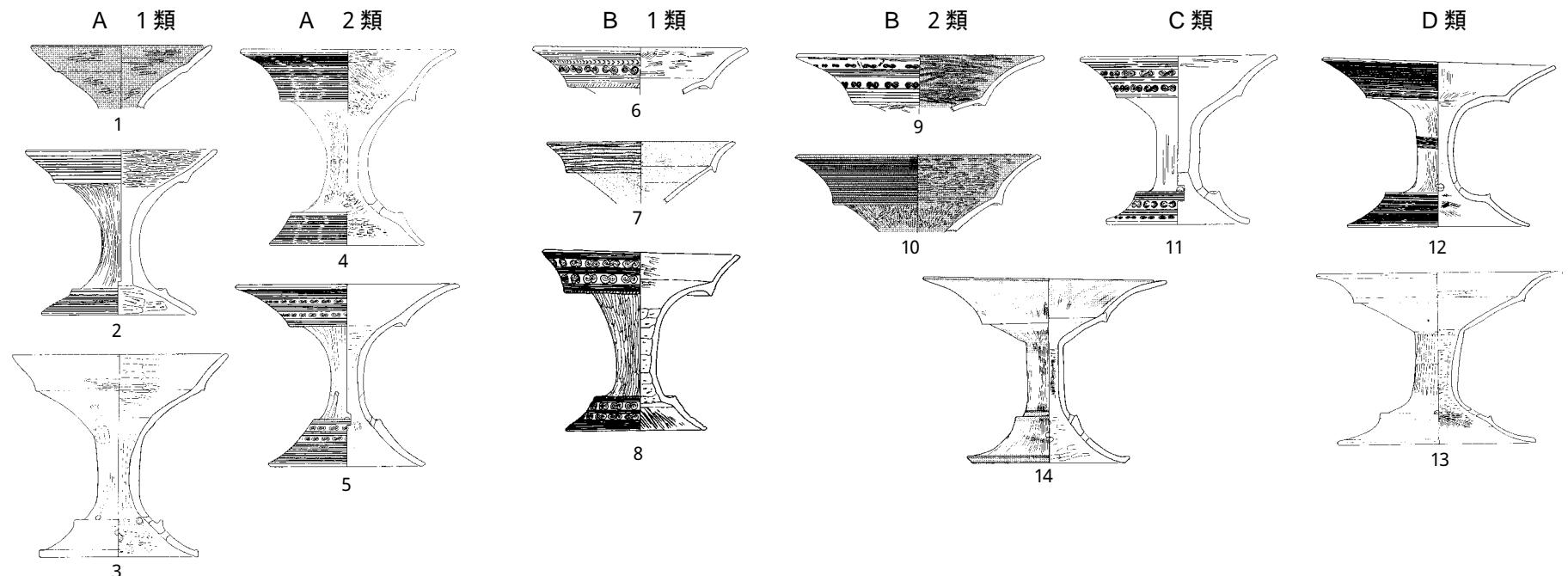


図2 器台・有段小型壺・有段細頸壺の分類 (S = 1 / 8)

確認できていない。

北陸型への変化を山陰での変化と対比すれば、口縁部を伸張させる変化は連動しているが、外反伸張させ、先端部を薄く作る点で異なる。ただ、山陰においても鼓型器台への変化が確定する前後の形式には、北陸型初現形式と類似した形式が見られる。

<有段鉢 図2> 有段の精製鉢を対象とする。山陰、北近畿等を主たる系譜とするきわめて多様な精製鉢がみられる。8類に分類した。他に定量的にみられる形式であっても今回の分類から除外したもののは多い。有段鉢の初現期の形式は、山陰、北近畿等の形式と峻別できないものが多い。そのことで、高杯や器台のごとく初現形式を北陸型に限定できないが、当該形式が一斉に出現する状況と、その出現を端緒として北陸型の形式が生み出され、盛行することを根拠に、北陸外地域の形式と類似するものも含めここでは初現形式と扱う。

A類からC類は、それぞれ高杯のA類からC類に対応し、D類～G類、中でもE類は高杯D類の系譜と理解している。A類では、14・15を定型化形式I類、16を定型化形式II類とするが、15については定型化形式II類の特徴を保持する。13はA類ないしB類と関連する初現形式で山陰にも事例がみられる。B類では、17・18を定型化形式I類、19を定型化形式II類とするが、18は15同様II類の特徴を保持する。初現形式が確定できた時点で再検討したい。C類では、20・21が初現形式、22は判然としないが口縁部の屈曲が緩慢な形状から同類の定型化形式II類に該当する可能性をもつ。

D類からG類は先行形式、類似形式が北近畿地域にみられる。型式変化ではA類～C類のように口縁部を大きく伸長しない。D類の23・24・25、E類の26、27、F類の29、G類の31・32を初現形式とする。G類は北近畿に酷似した資料がみられるが、他は、併行期の北近畿での形式と比較し、微妙ではあるが口縁部を伸張しており、北陸型への変容形式としたいが、教示をお願いしたい。28はE類、30はF類、33はG類の定型化形式I類。34・35はこれら形式の系譜に連なる定型化形式II類としたい。H類は山陰に類似形式がみられる形式。本類も型式変化では口縁部をさほど伸長しない。36を初現形式、37・38を定型化形式I類、39は同系譜の定型化形式I類か。

なお、F類の内29は高杯の可能性もある。また、A類の定型化I類とした15は、高杯の項でも触れたが、F類との関連でとらえるべきか。有段鉢は、当初より深いタイプと浅いタイプが見られるが、総じて深いタイプから浅いタイプへ、底部をもつものから丸底へと推移する。

<小型有段壺 図2> 有段口縁の小型精製壺を取り上げる。A・B類ともに山陰系譜の形式で、先行形式、類似形式がみられる。A類は、口縁部を伸長させず端部を丸く作り、頸部に円孔を穿つ。B類は口縁部を外反伸長させ、先端部を細く作る。A類では14を初現形式、15・16を定型化形式I類とする。II類についてはB類との区別ができない型式になると想定しているが不明。B類は17・18を初現形式。19～22は、A類との関連も含めその推移をたどれないが、B類の定型化II類としておく。また、19・20は口縁部を伸張しないのに対し、21・22は伸張する。便宜的に前者をBa類、後者をBb類としておく。

<有段細頸壺> 細頸壺はV-3群には確実に見られるが、2群期に精製品が出現する。口縁部有段の23・24は北陸型の形式として良かろう。当該壺は、頸部全長と段部から口縁端までの長さの比を型式変化の指標とできる。23を初現形式、24を定型化形式としておく。

2) 2群土器にみる北陸型形式の様相

<古相> 図3は、加賀の土器群から古相とできる北陸型形式を抽出したものである。北陸型の形式は、若干の定型化形式I類を含むが、そのほとんどが初現形式からなる。

鉢形高杯では A 類 (7・22・28・29) (注6)、B 類 (21)、C 類 (36・37) の初現形式と、C 類と思われる定型化形式 I 類 (35) からなる。D 類は確認していない。また、38は有稜タイプの北陸型の可能性をもつものとして掲載したが、事例が希で形式として認定できていない。器台の可能性もある。器台では A 類 (8・15・16・18)、B 類 (26・27・30・31・39)、C 類 (17) の初現形式と、A 類の定型化形式 I 類 (34) からなる。10・11は高杯の脚部の可能性をもつがスタンプ文をもった17・39との関連で掲載した。有段鉢では、C 類 (40・41・20?)、D 類 (5・19・33)、H 類 (1) の初現形式と F 類 (13)、H 類 (2・14) の定型化形式 I 類がみられる。他に今回分類から外した6の定型化形式 I 類?、32の初現形式が見られる。有段小型壺では A 類 (12)、B 類 (23・24) の初現形式がみられる。

これら形式の共有関係から遺構間の併行関係を検証できるまでの資料は整っていないが。該期の標式資料である北安田南出3区 SI01を軸に見ると、鉢形高杯 A 類7では八幡SH-22の22、北安田南出1区 SD02の28・29と共有関係が見られ、有段鉢 D 類5では竹松3号住(19)との共有関係がみられることから、鉢形高杯 B 類の初現形式21も該期の所産であるとできる。また、無量寺Bの溝状資料は一括資料とはできないが、有段鉢 D 類33との関連から、A 類の定型化形式 I 類器台34も該期の可能性をもつと推測している。その他、有段鉢 H 類の定型化 I 類、器台初現形式等の共有関係もみられる。

以上で見たように、初現形式を主体とし、定型化形式 II 類を含まない土器群が存在することは確実である。このような土器群を古相としてとらえている。

<新相> 図4は、土器群から新相の北陸型形式を複数に出土している事例を中心に抽出したものである。意外と事例は少ない。図4で明らかのように、定型化形式 II 類を主体とし、先での土器群との様相差は明らかである。

鉢形高杯では定型化形式 I 類ないし II 類 (1・12)、A 類系譜かと推定している定型化形式 II 類 (4)、B 類の定型化形式 II 類 (14)、C 類ないし D 類との系譜をうかがわせる定型化形式 II 類 (2・3・13) が見られる。器台では定型化形式 II 類 (6) と、I 類としたい16、帰属時期を保留するが C 類 (15) とがある。有段鉢では、定型化形式 I 類ないし II 類 (19)、有段小型壺では B 類の定型化形式 II 類 (5) が見られる。

なお、相川A群土器の資料 (7~10) は、該期の資料とされているものであるが、有段小型壺 A 類7は型式的に新しいとできるが初現形式であり、器台10も初現形式とせざるを得ない。対して鉢形高杯は C 類系譜かと推定される定型化形式 II 類 (8・9) からなる。明らかに新旧の形式が混在した資料と考えている。

以上は希少な事例であるが、鉢形高杯の定型化形式 II 類との併存では、祭式土器での明確な初現形式は見られないとする。そして、古相とした土器群との様相差は余りに大きい。初現形式からなる土器群から、定型化形式からなる土器群への推移については、定量的にみられる有段鉢の型式変化での検討が有効と考えているが、少なくとも北加賀では定型化形式の段階での有段鉢は顕在しない。次に、この間の状況を能登の資料を援用しつつ概観する。

<能登での状況> 図5の1から14は、能登での古相とできる北陸型形式を抽出したものである。加賀同様、初現形式が主体となる。

荻市下層大溝は時期幅があるため、2~5の高杯 D 類のみ抽出した。D 類は加賀では確認していない。徳前C SD12他の資料 (6~10) は、豎穴を囲む溝資料で活性は高いと判断している。D 類高杯6、A 類器台8、A 類ないし B 類有段鉢7、E 類有段鉢9等、初現形式からなる。谷内ブンガヤ

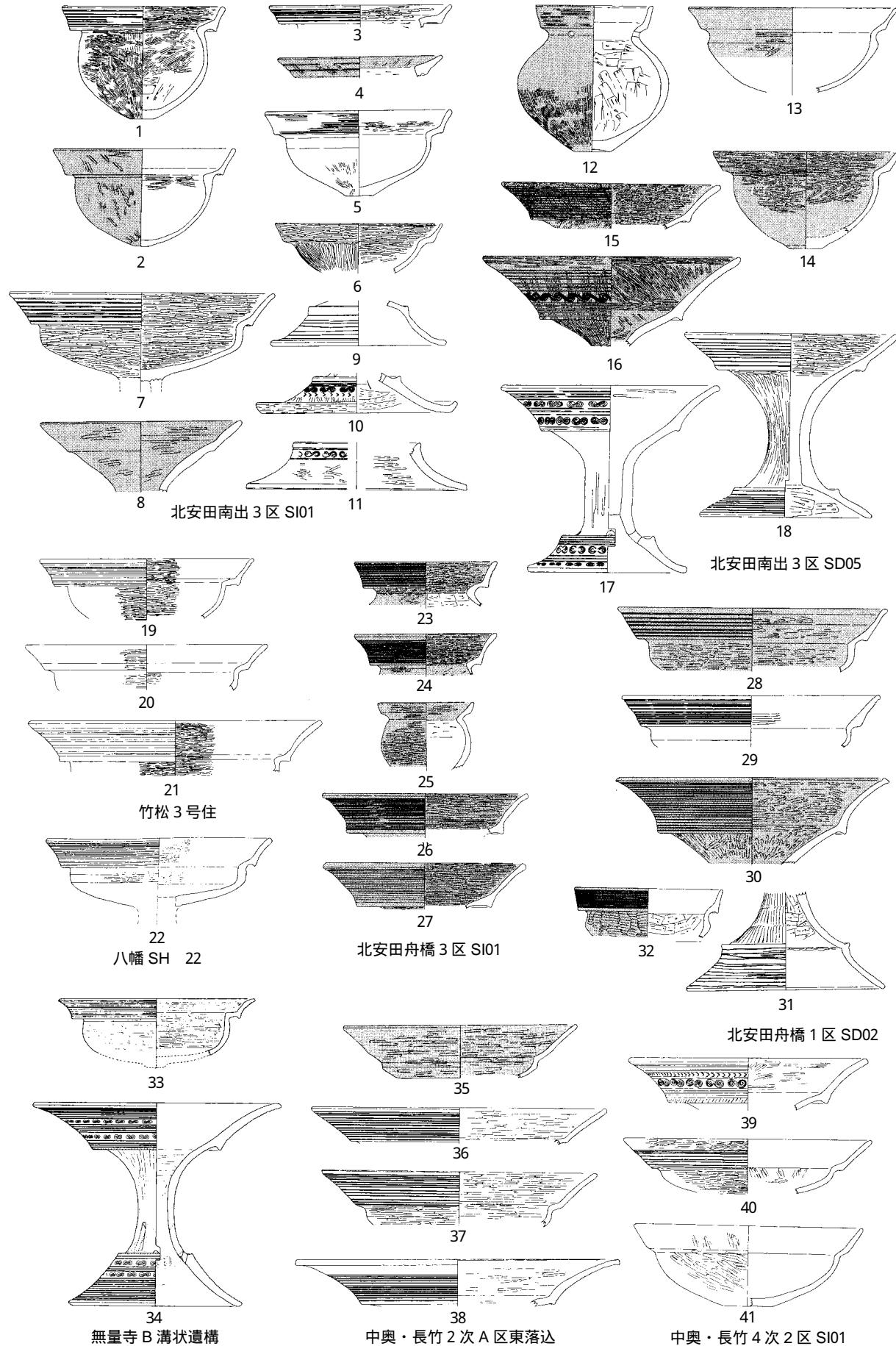


図3 古相の北陸型形式・加賀 (S = 1 / 6)

チ3号竪穴下部の器台12は脚部形状が変異しているがA類の初現形式とできようか。また、谷内ブンガヤチ30号土坑の13・14は、丹後系の台付鉢の2-1群併行期の資料と考えているものであるが、口縁部を伸張しており、該期での変化を象徴する参考事例としてあげた。

図5の15~32、図6の33~69は土器群から新相の北陸型形式を抽出したものである。ただし、図6の59~69は、3群に下る可能性を検討している。

鹿首モリガフチの資料（図5、15~28）は、溝資料ではあるが、祭祀に伴うとされ、時間幅なしとはしないが一活性は高いとみている。器台の明確な事例を欠くが、古相から新相への推移を窺う好資料である。高杯では、15・16は定型化形式I類ないしII類でC類の系譜かと推測している。対して

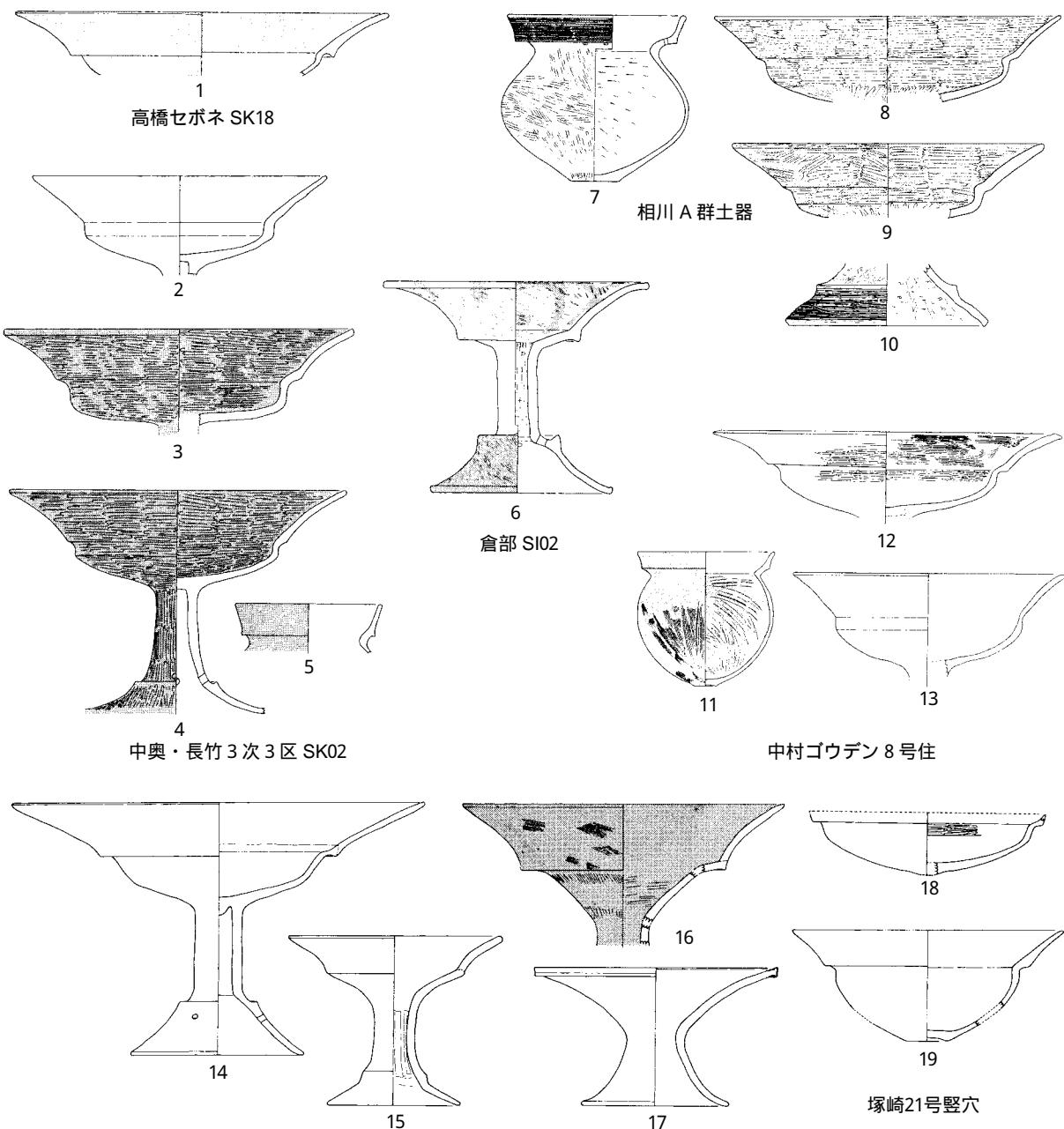


図4 新相の北陸型形式・加賀 (S = 1 / 6)

17は器肉を薄く作っているが、初現形式の形態を踏襲した亞種とでき、類例を知らないが、A類ないしB類系譜の定型化形式I類、18もA類ないしB類系譜、あるいは有段鉢F類との関連が考えられる定型化形式I類。有段鉢(19~23)は、定型化形式I類に分類したが、先の分類でも触れたとおりII類の特徴を備える。有段小型壺では初現形式A類の系譜に連なる定型化形式I類の24~27とB類系譜の定型化形式I類かと推定される28からなる。

当該資料は、定型化形式I類を主体にII類を含んでいいる可能性をもち、初現形式は含まない、とできる。また、定型化形式I類としたものでも、器肉を薄く作くり赤彩する等、定型化形式II類に類似する。当該資料は初現形式を含まない。定型化形式II類成立前後の事例としたい。

後続する土器群と考えているのが、奥原4号住(29~32)、矢田4号溝(33~40)、奥原2号住(41~46)等である。奥原4号住の有段鉢32は有段鉢A類、31はB類の典型的な定型化形式II類で、鹿首モリガフチ有段鉢19・22等と比較するなら、小型化し、底部が丸くなり、器肉が一層薄くなるなどの型式差が見られる。矢田4号溝の有段鉢38・39、奥原2号住有段鉢43でも同様の変化がみられる。

さらに新しい土器群と考えているのが、宿東山1号住、同・SG-01の土器群である。1号住の器台59・60は、改めて述べるまでもなく定型化形式II類であるが、器肉が一層薄くなり小型化している。1号住の有段鉢63も浅くなり同様の変化が見られる。SG-01有段小型壺67・68は、2-2群以降に盛行する口縁部を伸張するBb類ともみられる。組成を議論できる資料ではないが、2-2群以降に盛行する壺が、鉢より多い。これら特徴は、3群併行期の様相かとみている。

一方、宿東山6号住は、豊穴を拡張しており、二時期の資料からなるが、明らかに古いとできるものを検討する。有段鉢50・51は初現形式とできるもので、有段壺52も器肉を薄く作っているが初現形式の形態を踏襲する。また、器台57・58は、1号住と比較しても大型で重厚な作りの定型化形式II類とできる。55の高杯はA類の定型化形式I類とできる。これら資料に関しては、鹿首モリガフチ資料の時期を下るものではない。

<中沼C遺跡での検討 図7> 中沼C遺跡は方形周溝墓からなる墳墓遺跡。折戸靖幸は供献された器台と細頸壺のセットを出土状況を踏まえて整理し、図7にみる変遷を想定した(折戸1989)。

から は筆者が追記したものであるが、折戸は をI段階、 をII1段階、 . . をII2段階とする。この変遷を北陸型形式の分類に即してみれば、 の器台は初現形式D類、細頸壺は北陸型での検討から除外したが、2群には見られる加飾された形式である。 の器台は口縁部を伸張しているがB類の初現形式ないしは定型化形式I類とできよう。有段細頸壺は初現形式、 の器台は定型化形式I類の可能性をもつ大型で重厚な作りで、有段細頸壺は定型化形式II類とできるが、口縁部長に対し有段部が短く古相とできる。対して . の器台、細頸壺は、器肉を薄く均一に作った典型的な定型化形式II類とできるものである。折戸が示した推移は、北陸型形式の成立、展開で筆者が想定している推移とも良く整合する。

3) 小結

北陸型形式からみた2群の推移は、 初現形式からなる段階、 定量の定型化形式I類が主体を占める定型化形式II類出現前後の段階、 定型化形式からなる段階として大枠整理できよう。

の段階は、加賀での北吉田南出3区SI01、竹松3号住等、能登での徳前C SD12他が該当する。該期は初現形式よりなる段階であるが、北吉田南出3区SI01の有段鉢にみるように定型化形式I類を確実に含む。また、無量寺B溝状遺構の器台は定型化形式I類とした。共伴関係に保留部分を残すが、該期に器台にも定型化形式I類が成立していた可能性を予測させる。

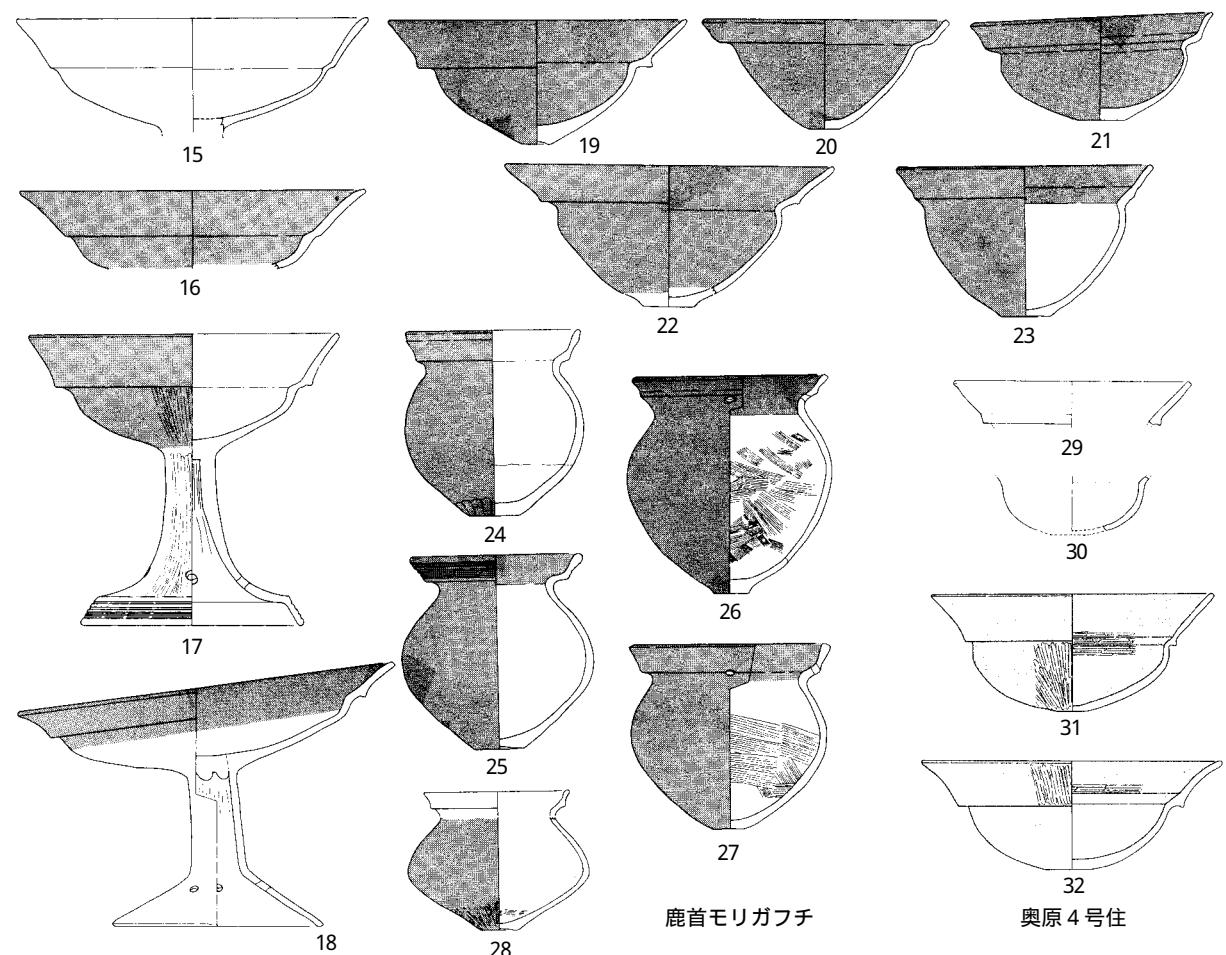
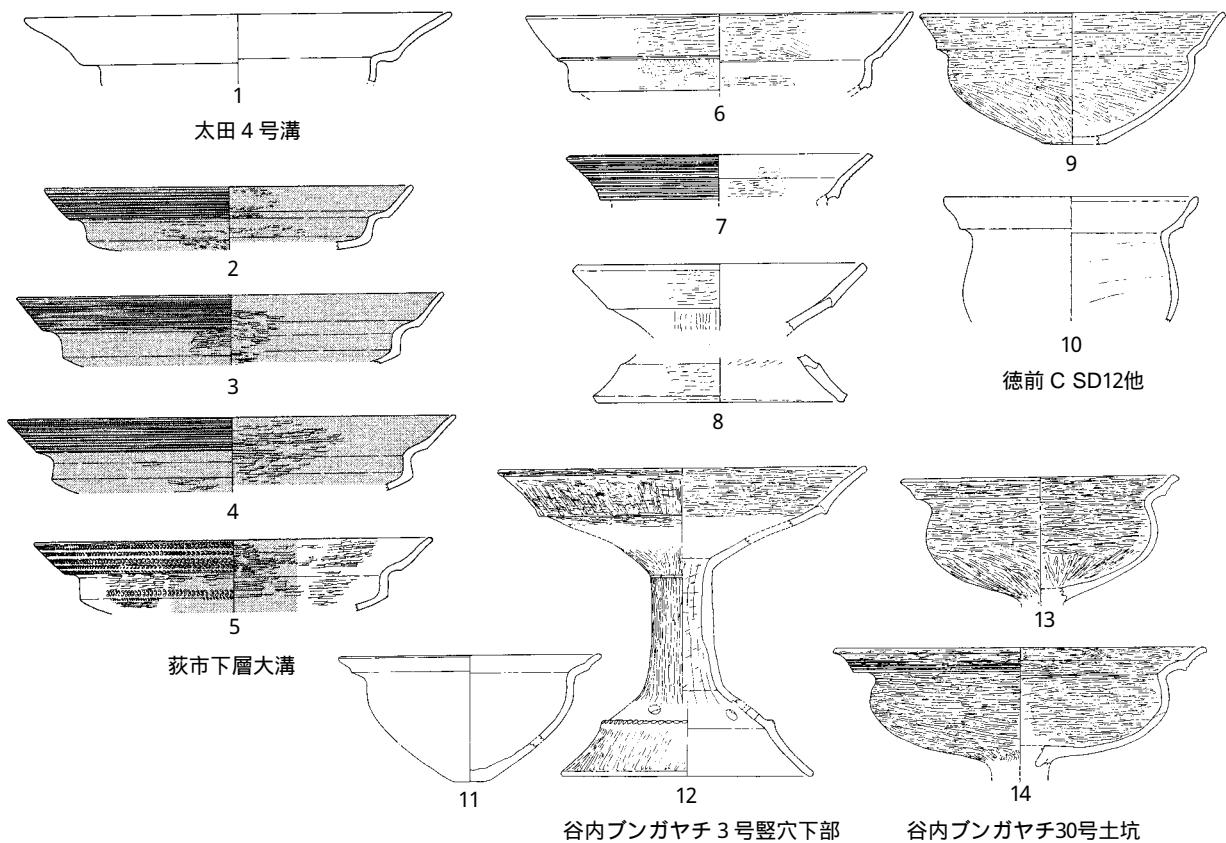


図5 2群での北陸型形式・能登 (S=1 / 6)

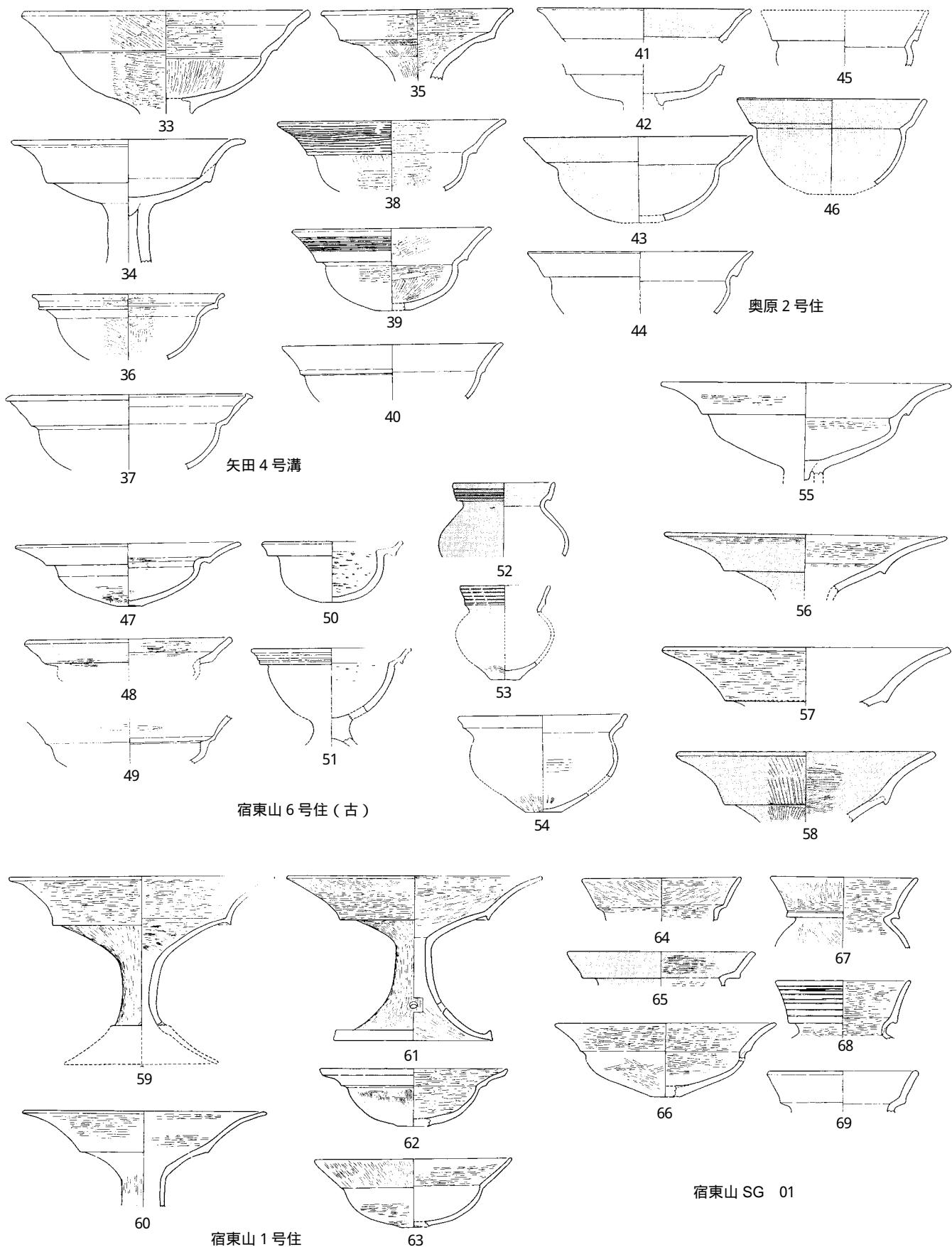


図 6 2群での北陸型形式・能登 (S = 1 / 6)

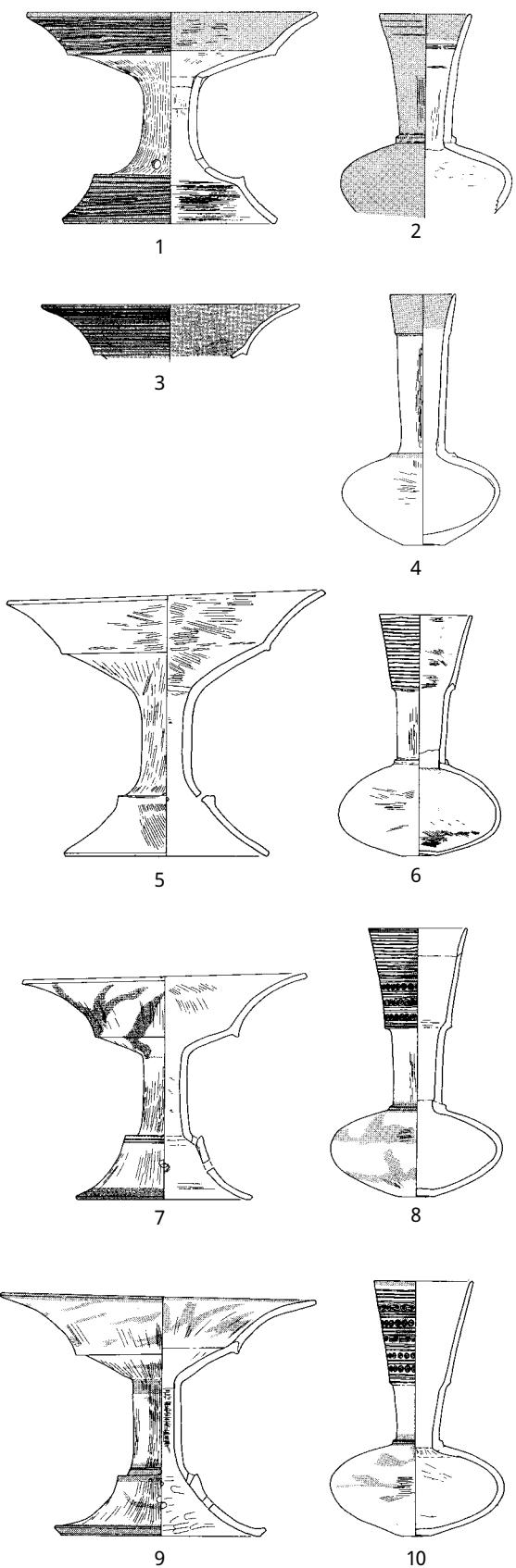


図7 中沼C遺跡にみる器台 + 有段細頸壺の推移
(S = 1 / 6)

の段階は、能登での鹿首モリガフチが該当。宿東山6号住(古)も該期に近いとしたい。加賀では明確な事例を確認できていないが、強いて求めるならば、中沼C遺跡での

とした段階が対応しよう。該期には鉢形高杯、器台、有段鉢、有段小型壺等、先で検討した形式で定型化形式Ⅰ類が定量化し、鹿首モリガフチでの鉢形高杯、宿東山6号住(古)での器台にみるように定型化形式Ⅱ類が成立していた可能性が高いとみている。ただ、典型的な北陸型形式からなる組成の完成には至っていない段階とできよう。なお、該期には、宿東山6号住の有段鉢のように、初現形式が共伴する可能性も残しておく。

の段階は、加賀での中奥・長竹3次3区SK02、中村ゴウデン8号住等、能登では奥原4号住、同・2号住が該当する。また、中沼Cでの・がまさにこの段階に該当する。該期は定型化形式Ⅱ類からなる段階で、中奥・長竹3次3区SK02でみたように、有段小型壺でも定型化形式Ⅱ類が確実にみられる。初現形式が共伴することはない理解しているが、中村ゴウデン8号住にみたように、定型化形式Ⅰ類は共伴する。

以上、三つの段階はあくまでも時間軸としての段階である。様式理解を含めた編年区分としては、の段階は事例が少なく実態に保留部分を残しているが、定型化形式Ⅱ類を含む可能性をもち、初現形式からなる段階とは峻別できることからに包含し、と・との二つに細分して理解する。を試案での2-1群に、・を2-2群にあてる。

4 祭式土器からみた編年の概略

祭式土器は土器組成のなかで重要な位置を占める。ここでは以上での2群の祭式土器の検討を軸に、V-2・3群から9群までの土器群の推移を概観し、当初の目的である法仏式(2群)月影式(3群)の様式的の特徴についての見通しを示す。

1) V - 2・3群

北陸型祭式土器がみられず、北陸固有の祭式成立以前の段階とする。加賀の土器群は、山陰系、丹後等北近畿系、近江系、及びそれら地域経由と推定される瀬戸内系、近畿系、東海系等からなり、いわゆる外来系の形式で土器組成が形作られる。これら地域からなる広大な土器圏に包含されていた段階といえようか。そして、北陸内での地域色は、語弊もあるが、受容する外来系形式の頻度差で形作られる。吉岡は、該期の土器群の特徴を、くだんの地域の形式を「合成した北陸型土器組成」とする（吉岡1991）。その点で該期は、大枠ではIV様式での凹線文系土器波及期での状況を継承した最後の段階ともとらえているが、北陸がこれら地域から無作為に外来形式を受容したわけではないであろう。2群での北陸型の土器様式に向けての素地を作った段階と評価している。該期に関しては、北陸（型）とできる特徴、波及のシステム等、基礎的な検討課題の多くを残している。標式資料は表1の通り。

該期の北陸内での地域色は甕組成での近江系の在り方に特徴的にみられる。近江系甕は、V - 2群は南加賀では希で北加賀に偏在し、V - 3群には、保留部分を残すが北加賀からも退潮するとできる（註7）。しかし、該期に北陸から近江系が消えるわけではない。越中・能登では、甕の主要な組成に留まっている（註8）。ただ、V - 2群との比較ではV - 3群での近江系の退潮傾向は確実に進行しており、それは甕だけではなく、他の近江系ないし近江経由と推定される形式にもみられる。そのことから、V - 2群とV - 3群との土器組成は、とくに北加賀で大きく変化した印象をもつが、「合成した北陸型土器組成」故のあり方とみたい。また、該期での近江系の退潮は、北陸ではなく近江の事情との予測である。

祭式土器との関連では、高杯は有稜形式からなり、北陸型の鉢形高杯は確認していない。対して北近畿系の台付鉢は定量みられ、平面梯川のSK41の事例（図8 - 2）を示したが、2群の当該形式（図5 - 13・14）と比較すれば明らかなように、口縁部の伸長で区別でき、先行する（注9）。器台は山陰系、北近畿・近江（経由）系がみられ、V - 3群には山陰系が増加し、口縁部の伸長をはじめる。が、変化の方向は一様ではなく、北陸型に収束する2群の変化とは区別できる。北陸型の形式は成立していない。鉢では近江系、北近畿系、山陰系等がみられるが、組成に占める割合は少なく、粗製の形式が目立つ。桜田・示野中SB10の北近畿系の鉢（図8 - 1）は、V - 3群の事例で、北陸型とした鉢E類や高杯D類の先行型式とできるが、2群の鉢E類の初現形式（図1 - 26）と比較すれば、これまた口縁部が伸長していない。有段小型壺では、しばしば脚をもつが、ソロバン玉状の体部に代表される加飾性に富んだ山陰系形式が僅かにみられるようであるが、時間軸での検討を進めたい。細頸壺は確実にみられるが、精製品は出現していないようである。少なくとも北陸型とした有段の形式は見られない。

その他形式では、ワイングラス形の鉢は台付きの形式も含め定量的にみられ、中でもV - 3群には大型化し増加する。該期での祭式土器群の核的形式とできようか。体部に突帯をもち加飾したタイプは2群で盛行するとみているが、時間軸での整理を進めたい。壺では口縁部に擬凹線文と円形浮文を施した播磨等東部瀬戸内系譜と推定している広口壺が多くはないが組成としてみられる。長頸壺はV - 3群で増加する。箱形、皿型の小型高杯も確実にみられるが、形態差がみられる。甕組成の主体をなす有段擬凹線文甕のV - 3群と2群との型式比較では、口縁部の伸長がわずかなものを定量含み、底部が大きく肉厚である。

該期の土器様相について繰り返せば、土器様式を構成する形式が、山陰系をはじめ多地域出自のいわゆる外来系の形式からなることがある。北陸で変容した形式を含もうが、北陸型形式からなる2群

以降のあり方とは決定的に異なる。祭式の詳細は明らかにできないが、少なくとも器台とセットとなる小型形式は顯在しない。小型形式に台付型式が目立つとの印象ももっている。また、それら形式も北陸外形式からなる。加飾性でも、スタンプ文等がみられるが、その盛行は2群期以降の特徴とみたい。そして、北陸型への基本的变化である甕、壺、高杯、器台等々、すべての形式にみられる口縁部の伸長傾向は未熟である。

2) 2 群

地域固有形式（北陸型）の出現・定着・開花期で、それら形式による北陸型祭式が確立するきわめて大きな画期と考える。そして、前段階での広域土器圏から離脱した北陸型形式による土器圏を形成する。V-2・3群での外来形式からなる土器様式とは際だった違いを見せる。該期は、祭式土器での初現形式主体の2-1群段階と、定型化形式主体の2-2群段階に二分する。標式資料は表1のとおりである。越中での江上A遺跡SD01、SD03資料は溝資料ではあるが、2-1群段階の様相を知る上で好資料と判断している。

祭式土器では、2-1群で、高杯、器台、有段細頸壺での北陸型の初現形式、有段鉢、有段小型壺での北陸型へと変容した初現形式が確実に成立する。そして、大型化と加飾性はピークを向かえる。例をあげれば、スタンプ文は該期でもっとも盛行する。その推移は、2-1群では集落遺跡等でも普遍的にみられ、2-2期には集落遺跡等では減少するが、後半段階以降、使用の場の限定と形式の特定化が進行したためと予測している。

また、該期は、有段鉢、有段小型壺等の器台とセットとなる形式の増加が大きな特徴といえる。越中の事例であるが、2群併行期の江上A遺跡では、1359個体の内、小型品が100個体近くあり、鉢の組成比は5%とのデーターがある（久々1984）。また、加賀ではV-3群の資料を含むが、2-1群を主体とする竹松遺跡で7%とする（安 1992）。器台+鉢、器台+有段小型壺・細頸壺、あるいは器台+ワイングラス形鉢という、器台を軸とした祭式セットが該期に確立したとみたい。そして、再三触れているが、そのセットは北陸型の形式により構成される。ただ、2-2群での有段鉢の出土量は、少なくとも北加賀では、能登と比較して少ないと印象をもっている。遺跡差、単に該当遺跡がみつかっていないということも含め、検討すべき課題である。

祭式土器の検討では扱かわなかった器種・形式やその組成も大きく変化する。壺では二重口縁壺が出現。対して、長い口縁部もつ長頸壺は前半期に衰退する。通常の長頸壺や短頸壺は、北加賀では能登と比較して目立たないようであるが、該期で有段化を進める。細頸壺は精製品と化し、定量的にみられるようになる。V群に定量見られたくだんの広口壺は、2-1群期の内に衰退する。高杯では、箱形の杯部をもつ小型高杯が増加する。V群にもみられたが、該期で定型化を進める。類例は北陸外にも見られるが、北陸型としての抽出を試みたい。ワイングラス形鉢も引き続き定量的にみられ、台付の形式は加飾性を増し壺形態へと型式変化をはじめる。対極として、V-2・3群での形状を維持しつつ推移する形式も見られる。この事は、他の形式においてもみられることである。甕は、先行する桜田・示野中SK70の事例が該当する可能性をもつが、底部を欠いていることと、口縁部形が甕とすれば定型化しているとせざるを得ないことから保留すれば、確実な事例は該期に出現するとできる。2-2群には盛行する。

甕組成は、竹松C遺跡では有段擬凹線文系が50%を優に超え、有段無文系が20%程度、くの字系は10%に満たない（安 1992）。有段擬凹線文系が優勢な在り方は加賀の特徴とできるが、高橋セボネ遺跡では、報告書掲載図110点余からの集計であるが、有段擬凹線文系が30%程度、有段無文系が60%弱、くの字系は10%余、近江系が10%弱の構成比をもつ。加賀にあって有段擬凹線文系の頻度の

低い高橋セボネ遺跡の評価は別に検討する必要があるが、それでも30%程度を占めている。有段擬凹線文系の堅調に加賀と能登・越中との違いをみいだせよう（注10）。また、有段無文系を山陰系譜と北近畿・近江系譜のものに区別すれば、その違いは一層明瞭になろう。そして、加賀では有段擬凹線文系を維持し、主体形式としての推移をたどり、月影甕が生成される素地が用意される。対して、能

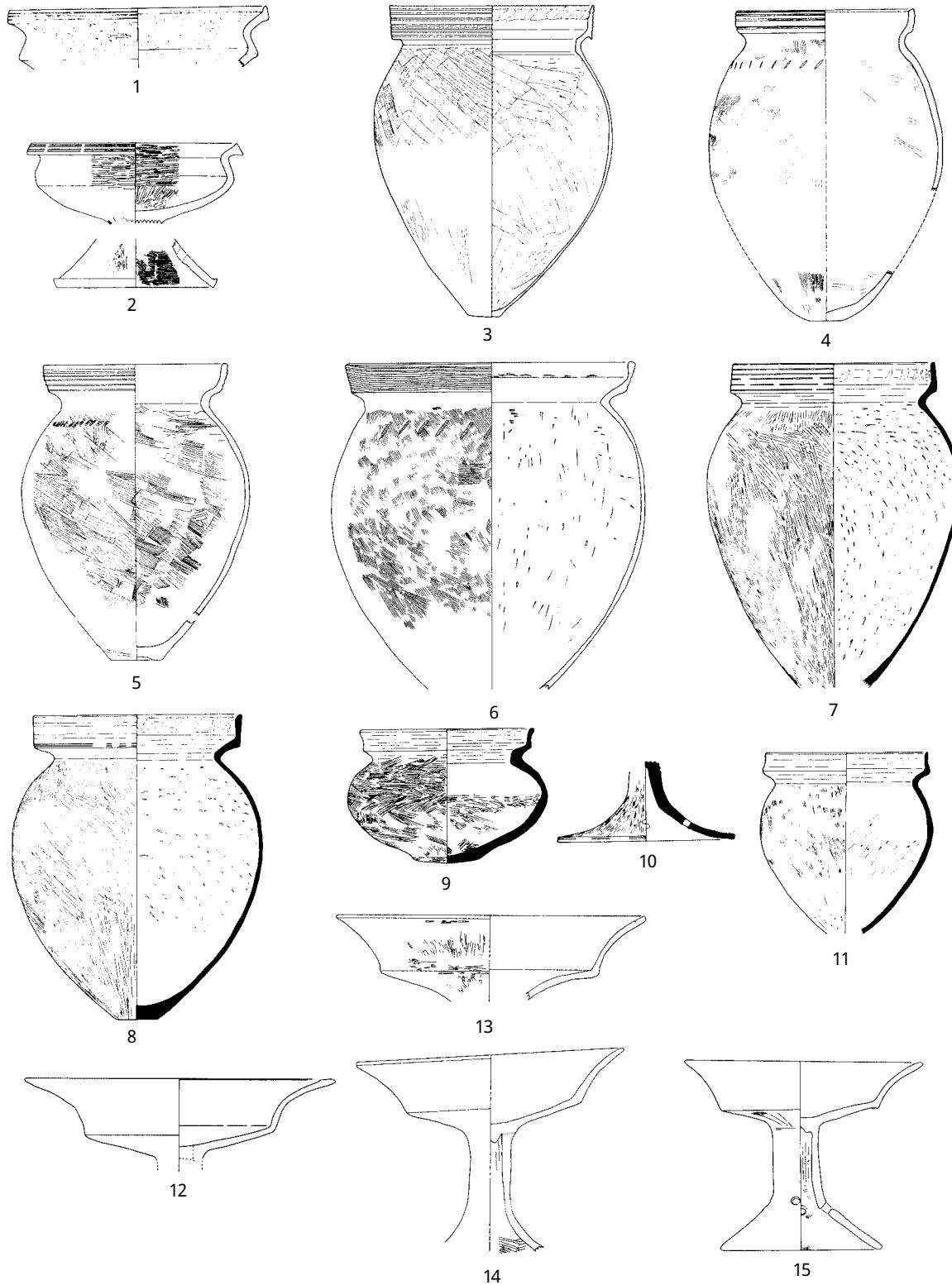


図8 長泉寺SK55他の土器 (S=1/6)

登・越中では有段擬凹線文系と近江系主体の組成から有段無文系と「くの字」系の組成に大きく変わる。加賀と、能登・越中との甕組成の差違は、月影甕が成立する3群期に決定的になるとできるが、該期にその動きが明瞭になることは確かである。

3) 3 群

2群での地域固有形式(北陸型形式)からなる土器組成を継承し、さらなる展開を示す段階とみる。検討対象とした祭式土器はその全てが継承される。その他の形式でもフラスコ形鉢(台付) 箱形杯部の小型高杯、甕等々が継承され、細別形式はともかくとしても該期で衰退する形式の抽出は難しい。たしかに、長頸壺は加賀では衰退するが、能登・越中では引き続き盛行する。その中にあって該期は、2群の形式を継承しつつ、型式変化を進めるとともに新たな形式を生み出し、祭式セットの構成も変化させる。月影型ができる祭式土器群を形作るといえよう。月影甕一色の甕組成は異様である。また、該期には北陸南西部での月影甕、装飾器台の出現に象徴されるように、北陸内での様相差は構成形式の頻度差から、保有形式の違いとしての動きをさらに顕在化させる。北陸北東部と南西部の土器様式の違いが一層明確になるといえるが、それは、北陸内での土器様式圏の分解であるとともに、北陸北東部、南西部を単位とした統合の進展ととらえることができる。標式資料は表1の通りである。

型式変化では、法仏式での大型指向から一転して小型化をはじめる。高杯に象徴的で、全ての形式で小型化を指向。V群以来の有稜高杯は、小型の竹生野型式(北野1991)等へと変異する。北陸型鉢形高杯も小型化する。その型式変化は、口縁部の伸張度や開き具合の程度で説明されていたが、そのこととも連動しないではないが、該期での主要な変化は、一部細別形式を除き、鉢状の杯部径絶対値の縮小という変異にあるとしたい。また、堀は該期での高杯の変化について高杯Dの出現をあげているが(堀2002) C類の新しい型式との区別が分からぬ。高杯Dを筆者の定型化高杯II類として良いなら、その出現は該期を遡る。その他の形式では、小型高杯は杯端部を丸く作った箱型へと齊一化する。台付ワイングラス形鉢は壺形へと変容。また、二重口縁壺が増加し、頸部に凸帯をもった月影型される二重口縁大型壺も該期には定型化するようである。これらを月影型への型式変化としたい。

新たな祭式土器の出現では、装飾器台の出現が特筆される。出現時期は、法仏式とする見解と、月影式とする見解(楠2003)が見られるが、現状の資料では、法仏式とできる事例は確認できていない。

祭式セットでは、有段鉢が減少し、有段小型壺との構成比が逆転する。形式でも定型化形式II類のBb類に主体が移る。ちなみに、3群を主体とする大友西SD01、同・東SD01では、壺36点に対し鉢は5点(金沢市 2002)。また、該期の標式とした一塚SX22と、ほぼ同時期のSX21では、壺11点、鉢は2~3点、能登で標式とした吉崎・次場S-3b土坑でも壺3に対し鉢は見られない。該期に祭式セットの大きな変革があったとしたい(注11)。この変化は装飾器台の出現と連動させとらえる必要がある。装飾器台は器台と鉢、ないしは壺ないしは鉢と結合したものと理解されているが、器台+鉢ないし壺等からなる法仏式での祭式を継承・発展そして形式化の動きの中で成立した事は確かである。また、この変化と連動していると予測しているのが、北陸型器台とした形式の器台に占める構成比の減少である。北陸型器台による祭式セットの法仏型規範の変質とできようか。そして分布域も北陸東北部で薄く、北陸南西部でも南加賀や越前等で濃くなるとの印象をもっている。

祭式土器構成の変化と装飾器台の出現を合理的に説明できるに至っていない。また、この変化は、北陸外地域での変化と連動した動きと想定しているが、対象地域やどのような変化に対応した動きなのかも検討できていない。該期は、北陸外地域の動きを敏感に受け入れる中で、法仏式での祭式を継

承しつつ月影タイプとできる型式を作り出し、地域固有型式を堅持、一層の固有化を進めた段階として評価したい。

3) 4群から9群以降

4群～6群は、北陸系土器の移動、外来系土器が波及する時期にあたる。土器の移動により、外来の祭式形式が波及し、北陸型の祭式形式と祭式様式は変質・衰退する。該期は、北陸型の祭式形式を生み出し、地域固有型式による祭式を顯在・開花、展開させてきた2群から3群の流れを大きく転換する画期といえる。

4群からの変化は、外来形式が波及する中で、北陸型形式が変質しながらも存続する4群～6群、在来の祭式形式が衰退し、畿内系祭式形式に急速に收れんしていく7・8群を経て、畿内系祭式形式からなる画期としての9群以降の段階へと移行すると整理できる。ただ、北陸北東部に関しては、北陸型形式が7群～8群、少なくとも7群までは堅調で、北陸南西部とは異なる推移をたどるが、それでも9群には、畿内系の祭式に大きく転換するようである。

4群から6群での北陸型形式に関し補足するが、高杯は小型化を一層進め、東海・近江系形式に置換。器台は北陸型、あるいは3群に見られた形式が衰退し、小型器台に置換されるが、これら器台の変質・衰退と小型器台の出現とは連動しない可能性がある。そのことは、有段小型壺や細頸壺等の有台化が、小型器台の定量的波及以前の4群に進行することからも窺える。また、祭式セットでは再び有段小型壺から有段鉢に主体を移動する（注12）この変化に関しては、2群での様相の再興としてではなく、該期以降にみる「北陸」外地域での鉢の盛行との関連で検討を進める必要があろう。その点で、鉢の形状は在来の形式とできるが、その祭式の内容まで北陸型とできるかどうか、検討の必要がある。そして、僅かではあっても、該期での高杯、器台、有段鉢等の北陸型祭式土器は、器種間で衰退の時期にズレがみられる。北陸型祭式解体の過程を検討する上で重要な事象と考えている。

4) 月影式と法仏式の境

筆者は法仏式と月影式とは、北陸型形式の顯示を基調に推移した大別様式に包括してとらえる。また、該期の北陸北東部では南西部での月影壺や装飾器台等、地域形式を象徴する顯著な形式の出現がみられず、大枠では2群の動きを継続する。その点で、北陸北東部では、法仏式併行期と月影式併行期とは、型式差による時間軸での区分はともかくとしても、形式の消長や、組成での区分は難しい。このことも法仏式と月影式を大別様式としてとらえるにあたって考慮したことであるが、月影式での月影壺や装飾器台等の地域形式の顯在を、北陸北東部の状況と対照させてとらえていく必要もある。なお、北陸北東部に南西部のような動きが全くなかったとはしない。念のために申し添える。

この辺りを踏まえるならば、月影式と法仏式の境の検討には、2-1群の評価は欠かせない。2-1群を北陸型形式の出現期として評価するなら、2-2群での定型化形式の成立は、その帰結としてとらえられ、月影式との境は、北陸型形式のさらなる変化や展開等に求めることになる。この評価をとらなければ、月影式に見られる北陸型形式の成立にその上限を求めることとなり、月影式の上限は2-2群、さらには2-1群へと遡上する。

法仏式と月影式の境を具体的な事例でもって検討する。高橋セボネSK54、一塚SX22、同・SX21、大友西SE18（古）はあるいは能登の事例であるが吉崎次場I-3b土坑は、月影壺や共伴する高杯の型式観から、ほぼ同時期の土器群ととらえている。これら土器群は、高杯では、V群からの有稜高杯はみられず、竹生野型等月影型の高杯が出現、北陸型鉢形高杯はくだんの杯部径が縮小したタイプか

らなる。祭式セットでは有段鉢から有段小型壺に比重が移行、そして、出現期の月影甕をもち古相の装飾器台を伴う。この様相は、先で月影式（3群）の特徴とみた諸要素を備えているとできる。当該土器群から月影式とすることには異論はなかろう。高橋セボネ SK54等々の段階を月影式とすることは良しとしても、月影式と法仏式の境はどこか。月影式とする諸要素の出現時期（遅速も含めて）の検討も課題として残っている。

定見は用意できないが、作業仮説を提示しておく。図8の5～7は、2・2群期には確実にみられる甕形式。出土頻度は高くないが、東山陰から信濃までの広範囲に分布しており、それら地域間での併行関係、時間軸の特定に有効な形式と考えている。月影式成立前後では、高橋セボネ SK18（5）

御経塚オツソ SI02（6） 長泉寺 SK55（7）の型式変化が想定され、長泉寺 SK55の事例が確認できる最新型式（註13）である。そして、長泉寺例は月影甕成立時に限りなく近い時期の所産と想定しているが、月影甕との共伴事例は確認していない。消極的な根拠であるが、現時点では長泉寺 SK55 最古の月影甕、との予測もできよう。当該型式の「型式」帰属では、高橋セボネ SK18は供伴資料から法仏式、御経塚オツソ SI02の型式は、図面を提示しなかったが、供伴資料には月影式とする要素を抽出できない。微妙ではあるが法仏式としたい。対して、長泉寺 SK55の型式は、図8の8～11の共伴資料しかなく、10の有段小型壺がわずかに月影式に属する可能性を示唆する程度である。一方、3の八里向山 A SI101Aの事例は、高橋セボネ SK54等々の段階とできる月影甕で、7と形状の似たものとして抽出した。7との比較では、口縁部の形状はともかくとして、胴部最大径の位置がやや低いことから、一般論として新しいといえるが、両者は形式を異にしており時間差と決めつける事はできない。

図8の12～15は、法仏式での有稜高杯と月影型高杯との過渡的形式と考えている形式。ただし、当該高杯が型式変化させ月影型高杯になるとは理解していない。12が中村ゴウデン 8号住、13・14が先での高橋セボネ SK18、15は先で月影式とした高橋セボネ SK54の出土資料である。中村ゴウデン 8号住は法仏式の後半、2・2群でも前半に遡らないと考えている資料で、高橋セボネ SK18の13・14との型式比較では僅かであっても古いとでき、他の供伴資料の在り方とも矛盾しない。高橋セボネ SK18と高橋セボネ SK54の14と15の比較では、これまた微妙であるが14が古いとできる。そして、先にみた高橋セボネ SK18（法仏式） 御経塚オツソ SI02（法仏式） 長泉寺 SK55 高橋セボネ SK54（月影式）時間軸が正しいとするなら、高橋セボネ SK18と高橋セボネ SK54の高杯型式の間に、御経塚オツソ SI02と長泉寺 SK55の土器群が入ることになる。

以上は、仮定上の議論であって、現状では、長泉寺 SK55甕型式が、高橋セボネ SK54等々の段階に先行するとの保証もない。ここでは明確に法仏式とできる高橋セボネ SK18と月影式とできる高橋セボネ SK54の間に、当該高杯形式では僅かの型式差しかみられないことを指摘しておく。この事を踏まえ、御経塚オツソ SI02を法仏式、高橋セボネ SK54等々の段階を月影式とし、長泉寺 SK55については、作業仮説として月影式に含まれる可能性をもつ段階とし、今後検討を進めることとしたい。

最後に、冒頭にも触れた塚崎21号竪穴の帰属を検討する。当該資料は、二時期以上の重複があるとしなければ理解できないので、その古段階の標式的資料を対象とする（図4-14・16・18・19、図8-4）。図8-4の甕はやや変容しているが、くだんの甕形式に属し、高橋セボネ SK18の形式に類似、少なくとも御経塚オツソ SI02の型式よりは古い。図4-14の鉢形高杯は、脚部が小さく口縁部の伸張が著しいが、鉢形の杯部径は縮小していない。法仏期の形勢を保つ。図4-16の器台は、定型化形式Ⅰ類ともできる形状をもつ。図4-19の鉢は宿東山 SG-01と同一形式に属するが（図6-66）、深い作りで明らかに古く、全形は鹿首モリガフチの鉢（図5-19・22）に類似し、法仏式でも終末と

はできない。組成では検討を満たすまでの資料はないが、祭式セットでの有段鉢が複数みられるのに対し、壺は図を提示しなかったが、形式、帰属不明の底部片のみである。法仏式に盛行した器台+有段鉢の祭式セットを保持していたととらえるのが妥当であろう。以上は、いずれもが法仏式の要件に沿うもので、月影式とできる要件は確認できない。塚崎21号竪穴古段階資料は、法仏式とでき、先の検討での、高橋セボネSK18より古くとも新しくなることはない、としておきたい。(注14)。

5 まとめ

V群から9群までの祭式土器からみた推移を、北陸型形式が少なくとも顕在せず、山陰、北近畿、近江等形式からなる段階(V-2・3群)。北陸型形式とできる固有の地域型式を顕在させた段階(2群、3群)。北陸型の形式が変質・衰退し、畿内系形式に收れんする段階(4群から8群)。畿内系形式からなる段階(9群以降)として把握した。

そして、法仏式と月影式を、それぞれ独自の展開をみせる別個の様式としてではなく、北陸型形式の成立・定着、開花・展開に至る一連の動きを共有して推移した大別様式に包括してとらえ、の段階に包含した。月影式での変化や変革を軽視するものではないが、法仏式からの連續性を視点に該期の土器群の推移をとらえ直したい。

一方、法仏式に関しては、既往の法仏Ⅰ式ないしは法仏式古段階を法仏式から分離し、V-3群とした。該期を法仏式とする理解は、楠編年、栎木編年のみではなく、少なくとも県内では認知されていたといえ、筆者もその理解に与していた。V-3群を法仏式に含めることは、地域固有形式の出現という顕著な特色を曖昧にし、月影式での地域固有形式の顕在の強調と、法仏式をその前史とする理解の助長につながると考える。そのことは、法仏式と月影式の境をみえにくくすることである。

V-2・3群は、山陰等北陸外地域の形式で北陸の土器組成が形作られる段階とした。北陸固有の形式が無いとはできないであろうが、大枠で、外来系形式により北陸の土器群が形成(合成)されたとの指摘は可能であろう。このことから、北陸はこれら地域を含めた広域土器圏に含まれていたとできようが、山陰系・北近畿系・近江系形式等々としたように、一方では地域型式が存在していた。その在りようについての検討が必要であるが、地域型式をもつ地域と北陸での在り方との違いを如何に理解していくのか、新たな課題が生じた。

そして、2群併行期になると、丹後・山陰等々の地域でも、一層地域色の顕著な地域型式を生み出していく。その中で、広域土器圏が分解の方向に向かうといえる。北陸もこの動きに連動する。該期での地域色の生成を視点とした北陆外地域での動向の把握とその併行関係の確定は、法仏式と月影式を同一様式としたことにより、一層、重要な課題となった。

月影式は庄内式と併行する時期をもつ。庄内式については弥生土器から外す理解が一般的とできようが、畿内周辺部ではその併行期をV様式の流れの中で理解する見解がみられ、庄内式の特徴が及ばなかった地域も確実に存在する、とされる。また、大和においても、典型的な庄内期は除くが、古段階の一部をV様式からの流れでみる理解もある。(藤田・松本1989) 筆者の法仏式と月影式を同一様式でとらえるとした理解は、畿内周辺部での理解に共通するともできるが、先に見たように月影式にはいくつかの変化、変革が見られた。この変化はどこからの影響か。また、月影甕の成立は庄内甕の成立に先行しても遅くならないとの予測でもいる。庄内式には布留式に継起する形式が見られる。弥生土器から外す理解に異論を唱えるつもりは毛頭ないが、該期での土器変化を、庄内式の動きのみで説明できないのも事実としてある。

該期での、型式名の扱いについては、2群と3群を一括した型式名を冠するのが、本稿の趣旨にもっとも合致するが、法仏式の段階と月影式の段階は区別が可能であるとの、研究史も踏まえ型式名を踏襲することとした。ただし、繰り返すがV - 3群は法仏式から除外する。筆者の中では、5群から8群までの大別様式の前半部分を白江式としたことと同じ方法と理解している。

最後になるが、本稿を成すに当たっては、2 - 1群とした土器群の評価が大きく係わっている。当該土器群は、従前あまり議論の対象とはなっていなかったように思う。筆者も当該土器群に注目する以前は、2 - 2群の多くを月影式とする方向で検討を進めていた。2 - 1群を北陸型形式の成立期と位置づけた事で、2 - 2群をその開花期とできた。また、漆町編年での(+)群も編年時に模索していた一塚SX22段階に戻すことができた。本稿の根拠とした2 - 1群土器群について、検証をお願いしたい。

注1 土器は実用的機能のみで説明できるものではなく、何らかの形で祭祀と係わると理解している。その点で特定形式をとり上げ祭式土器とするのは適切でないとも考えている。ここでは、墳墓や祭祀関係と推定される遺構でみられる形式の中から、出土頻度が高く編年的推移を検討するのに有効と思われる形式を任意抽出し、それらの名称として暫定的に祭式土器と呼んだ。

注2 猫橋式は、表1の試案でのV - 1群とV - 2群があてられている。南加賀の猫橋遺跡出土品により型式設定されたが、加賀全域を包含した型式名として妥当性や、該当時期幅と様式的区分とが整合しているのか等、未検討部分を残している。ここでは、単に法仏式に先行するV様式併行期の土器群として用いたが、詳細は、今後の検討に委ねたい。

注3 月影式は、北陸を代表する弥生終末の土器様式として、あるいは最古の土師器として、学会に周知されてきた。月影式を独立した様式としてことさら強調した論考は知らないが、学史の重みと月影甕一色の甕組成は、独立した様式との印象を与えないはずもなかった。地元の者であればなおさらである。

注4 3,1) 項で触れる北陸型鉢形高杯定型化形式Ⅱ類、あるいはA類の定型化形式Ⅰ類等を指す。

注5 定型化形式Ⅰ類については、初現形式が北陸型とできる系譜の形式と外来形式の型式的特徴をもつものとは区別が必要と考えている。ここでは整理できなかったが前者は定型化形式Ⅱ類に近い評価が必要であろう。

注6 28・29についてはA類に含めたが、細別形式として抽出できると理解している。

注7 V - 2期の北加賀の白山市八田小鶴遺跡、同旭遺跡SI64では、近江系が40~50%を占め、有段擬凹線文系は30%に留まる。対して、南加賀では良好な一括資料はなくV - 1群の資料を含む猫橋1号溝では近江系は希で、有段擬凹線文系がそのほとんどを占める。V - 2群での加賀での顕著な地域差といえる。V - 3群になると、北加賀でも近江系が急速に衰退するようである。金沢市桜田示野中SB10、SK70等では有段擬凹線文系が50%を超え、近江系は確認できない。南加賀の平面梯川101平地建物関連遺構でも、有段擬凹線文系は60%程度で近江系は確認できない。

注8 2群資料も含むが越中・下老子笠川の老子Ⅱ式では30%弱みられ、能登・吉崎・次場Ⅰ・3号溝でも定量的にみられる。該期の北陸での甕組成については、吉崎・次場で有段擬凹線文系1%とされる(今井1994)など極端な事例が報告されており、大枠地域単位での要約では済まされないが、能登・越中では、有段擬凹線文系が少なく、近江系をはじめ有段無文系、くの字系の頻度が高い。

加賀では有段擬凹線文系が主体とでき、時期の下降とともにその頻度を増すとできる。この動きは2群期での甕組成の推移につながる。

注9 該期には、北近畿系、山陰系等の形式に、2群で北陸型の形式へと推移する先行型式がみられるのは確かである。こ

これら形式に関しては、V - 3群と2群との型式区別と組成の中での位置づけ、評価を明確にしていく必要があろう。北陸型形式の出現時期について付記すれば、表1でV - 3群の標式とした土器群には、先の3項で検討対象とした北陸型祭式土器は確認されていないし、他の関連資料にも現段階で矛盾する事例はない。そして、壺、高杯等普遍的にみられる形式からみた時間軸でも齟齬はないと考えている。ただ、遺構資料の場合、形式の偏在は避けられず、組成での時間軸の決定には限界がある。北陸型とした形式との併存状況については、今後とも検証を続ける必要があろう。このことは、組成からの検討、型式からの検討のいずれにおいてもつきまとう課題である。

- 注10 該期の壺には、有段壺と「くの字」壺との中間的形態の型式が目立ち、さらには近江系壺の変容形式が混在し、厳密な構成比を求めるのは難しい。が、能登・越中では、有段擬凹線文系がV群で30%程度のものが該期で15%程度に減少、有段無文系は同じく15%程度から25~30%程度に増加し、遺跡によってはさらに多い事例がみられるようになり、「くの字」系も25%程度から40%超程度に増加する。そして近江系壺は30%程度から極端に減少する（岡本2006、谷内尾1984、土肥1986）。
- 注11 この変化は能登、北加賀、若干の保留部分を残すが越中で確認しているが、南加賀、越前での動きは保留しておきたい。
- 注12 4群から6群を主体とする近岡ナカシマ2号溝の下層では有段小型壺11点に対し有段鉢7点、同溝の上層では有段小型壺1点に対し有段鉢8点、御経塚ツカダでの4群から6群の資料では有段小型壺3点に対し有段鉢は16点を数える。
- 注13 長泉寺の事例は月影壺との区別が難しく、月影壺とするか否かの結論が保留されているようである。底部は残りが悪く詳細な観察はできないが、赤化した被熱痕跡がみられる。このことから保留部分を残すが月影壺とはしない。また、形状でも図8での型式組列にスムースに収まる。なお、高橋セボネSK18は、内面刷毛調整、御経塚オツソSI02は削り調整を探るが、帰属する土器圈での調整方法を反映した可能性もあり内面調整の違いを一概に時期差ととらえることはできない。
- 注14 先稿（田嶋2006）では月影式に含めた。2 - 1群の土器群が把握できていなかったことによる。ここに訂正する。

引用・参考文献

- 今井淳一 1994 「第2章 第2節 弥生土器」『吉崎・次場遺跡』羽咋市教育委員会
- 岡本淳一郎 2006 「第X章 4 研波平野北部の古墳出現期土器」『下老子笠川遺跡発掘調査報告書（第五分冊）』富山県文化振興財団
- 折戸靖幸 1987 「第4章 まとめと若干の考察」『高松町中沼C遺跡』高松町教育委員会
- 河合忍・稻石純子 1997 「IV考察 翠尾I遺跡出土の弥生土器について」『翠尾I遺跡発掘調査報告書』八尾町教育委員会
- 木田 清 1998 「法仏式の認識と再確認」石川考古学研究会々誌41
- 北野博司 1991 「大型土坑について」『押水町冬野遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター
- 久々忠義 1984 「II総括 B 弥生時代の時期区分」『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町木製品・総括編－』上市町教育委員会
- 楠 正勝 1996 「第5章 まとめ」『西念・南新保遺跡IV』金沢市・金沢市教育委員会
2003 「装飾器台の成立と展開」『庄内式土器研究』26
- 高橋浩二 2000 「古墳出現期における越中の土器様相」庄内土器研究22
- 田嶋明人 1986 「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡I』石川県教育委員会
2006 「「白江式」再考」『吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』
- 板木英道 1987 「第5章 考察」『吉竹遺跡』石川県埋蔵文化財センター
- 板木英道 1995 「第8章 考察」『谷内・杉谷遺跡群』石川県埋蔵文化財センター

- 土肥富士夫 1986 「B 区 4 号溝下層土器」『矢田遺跡』 七尾市教育委員会
- 橋本澄夫 1968 「弥生文化の発展と地域性（北陸）」『日本の考古学』Ⅲ
- 浜岡賢太郎・吉岡康暢 1962 「加賀・能登の古式土師器」古代学研究32
- 藤田三郎・松本洋明 1989 「大和地域」『弥生土器の様式と編年』木耳社
- 堀 大介 2002 「古墳成立期の土器編年 - 北陸南西部を中心に - 」『朝日山』朝日町教育委員会
- 安 英樹 1992 「第 9 章 総括」『竹松遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター
- 1993 「能登地域における布留甕について」庄内土器研究 4
- 谷内尾晋司 1983 「北加賀における古墳出現期土器」『北陸の考古学 I』石川考古学研究会
- 1984 「第 5 章第 1 節鹿首モリガフチ遺跡出土土器の様相と占める位置」『鹿首モリガフチ遺跡』石川県埋蔵文化財センター
- 湯尻修平 1986 「能登・邑知地溝帯における「月影式」併行期の土器群」『シンポジウム「月影式」土器について（報告編）』石川考古学研究会
- 吉岡康暢 1976 「IV 総括 1 土器の編年と遭構の年代」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』石川県教育委員会
- 吉岡康暢 1991 「北陸弥生土器の編年と画期」『日本海域の土器・陶磁器』六興出版

参考・引用報告書

石川県

石川県立埋蔵文化財センター・（財）石川県埋蔵文化財センター

- (能登) 1984『鹿首モリガフチ遺跡』、1986『徳前 C 遺跡(ⅡⅢ)』、1987『宿東山遺跡』、1988『竹生野遺跡』、
1988『吉崎・次場遺跡』、1991『押水町冬野遺跡群』、1987『宿東山遺跡』、1995『谷内・杉谷遺跡群』、1995『徳前 C 遺跡』
- (北加賀) 1972『古府クリビ遺跡』、1976『北陸自動車道関係調査報告書Ⅱ』、1976『北陸自動車道関係調査報告書Ⅲ』、1990『倉部』、1991『畠田遺跡』、1991『金沢市寺中 B 遺跡』、1995『北安江遺跡』、2002『藤江 C 遺跡Ⅳ・V』、2004『近岡遺跡』
- (南加賀) 1977『加賀市二子塚遺跡群調査概要』、1988『白江梯川遺跡Ⅰ』、1989『漆町遺跡Ⅲ』、1989『高堂遺跡』、1995『平面梯川遺跡Ⅰ』、2000『小松市平面梯川遺跡』、2004『猫橋遺跡』、2007『猫橋遺跡』

市町村教育委員会

- 宇ノ気町教育委員会 1987『宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡』
- 高松町教育委員会 1987『高松町中沼 C 遺跡』
- 志雄町教育委員会 1995『二口かみあれた遺跡』
- 羽咋市教育委員会 1986『柴垣須田遺跡』、1994『吉崎・次場遺跡』、1999『太田ニシカワダ遺跡』、2003『滝谷八幡社遺跡』
- 押水町教育委員会 2003『今浜 A 遺跡』
- 七尾市教育委員会 1982『七尾市奥原繩文遺跡・奥原遺跡』、1986『矢田遺跡』

金沢市、金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）

- 1983『金沢市西念・南新保遺跡』、1983『金沢市二口六丁遺跡』、1983『二口町遺跡』、1985『金沢市新保本町東遺跡・西遺跡』、1986『金沢市南新保 D 遺跡』、1987『金沢市南新保三枚田遺跡』、1986『金沢市近岡ナカシマ遺跡』、1987『金沢市松寺遺跡（第2次）』、1987『金沢市押野西遺跡』、1990『金沢市下安原遺跡』、1991『金沢市新保本町東遺跡』、1991『桜田・示野中遺跡』、1995『上荒屋』、1995

『金沢市額新町』、1996、『金沢市西念・南新保遺跡Ⅳ』、2002『金沢市千田遺跡』、2002『金沢市大友西遺跡Ⅱ』

野々市町教育委員会 1984『御経塚ツカダ遺跡発掘調査報告書Ⅰ』、1989『押野タチナカ遺跡』、1992『押野ウマワタリ遺跡』、1996『高橋セボネ』遺跡、1998『長池・二日市・御経塚遺跡群』、2001『御経塚シンデン遺跡』

松任市教育委員会 1995『旭遺跡群』、1997『松任市竹松遺跡』、1988『松任市八田小舗遺跡』、1989『松任市中村ゴウデン遺跡』、2000『松任市中奥・長竹遺跡』、2007『白山市北安田舟橋遺跡 白山市北安田南出遺跡』

小松市教育委員会 2004『八里向山遺跡群』

福井県

福井県教育庁（埋文センター）

1986『六条・和田地区遺跡群』、1994『長泉寺遺跡』、2007『東古市縄手遺跡』

福井市 1990『福井市史 資料編1考古』

清水町教育委員会 2002『瓶谷』

三国町教育委員会 1979『西谷遺跡』

富山県

(財)富山県文化振興財団 2006『下老子笠川遺跡発掘調査報告』(財)富山県文化振興財団

大門町教育委員会 1981『串田新遺跡Ⅱ』

上市町教育委員会 1982『北陸自動車道遺跡調査報告 上市町土器・石器編』、1984『北陸自動車道遺跡調査報告 上市町木製品・総括編』

婦中町教育委員会 2002『富山県婦中町千坊山遺跡群試掘調査報告』、2003『富山県鍛冶町遺跡発掘調査報告』